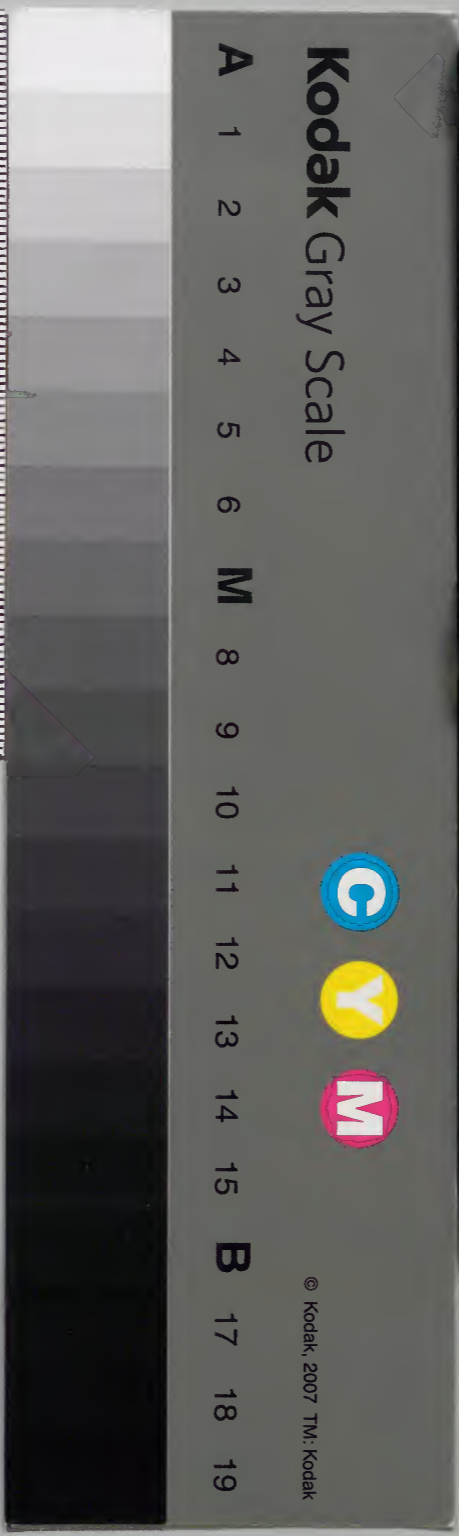


庫 文 閣 内			
二〇二	二五八六	和	
函	八	書	
一	五	類	
架	冊	號	

内 閣 文 庫	
番 號	和 25868
冊 數	5 ( 4 )
函 號	202 10

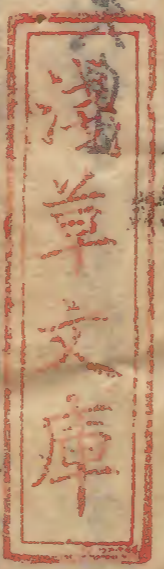
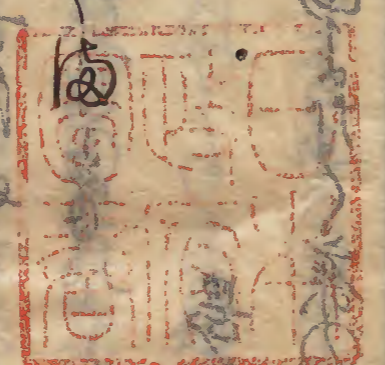




井原抄第四

周名之

いなり



中納言の平

大業右衛門八世の御孫  
とありていなりは此の末に御少の松平とありて今海に  
此君表濃國情を國よありとのを御察と云  
下國情を國一文字信交山也皆松平の平  
心身懐由利なり任の所や源一と云んおはつ  
た好し新古今十續拾遺六又十六新後撰

井原抄







神武の三むらり山と林ゆきあはさきたんろるむらり山に  
丹山國の天皇會於丹山國の人とて

三國河を築くなる所神武ののみむらり山と河を築くは

大和國也神武の山神武の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山

神武の山と河の山と河の山と河の山と河の山と河の山



古十一  
屋まよふは名羽の渡りもなごころ人のまごころのあはれを  
養羽山をいふまごころお板が園のまごころのまごころとあるが

讀音人一  
まごころ

多利川雪けの氷も雪で雪はあつたまごころのまごころ

西坂中山科ごころ山城國也渡と川とけは通あ

下流をいふ山は限山科コノコのまごころ

物ごころ一里菅系一山中山田若

まごころ後撰十八  
まごころ

まごころまごころのまごころまごころのまごころまごころのまごころ

後拾遺十九 後徳源寺

朝みまごころまごころ今まごころは依みまごころまごころ

山城國也

古今十八

まごころまごころまごころまごころまごころまごころ

後撰十七

まごころまごころまごころまごころまごころまごころ

大和國也

まごころまごころまごころまごころまごころまごころ







○方回

三芳野

○

三芳野のあふ川乃をの神とあふいふとくはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはてはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

紀伊也子細見葛葉集

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

山城國也

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

いふとくはてはてはてはてはてはてはては

大和也

いふとくはてはてはてはてはてはてはては



いばせの船橋よりいばせの船橋まで  
千載十四の源仲總

任のまじしはの中川流終てあるれ  
三の別所を百葉十の。上野のよのくらに  
らあれしや。我まのんをいばせ  
とせのん、舟橋のり

赤人の  
林園のよびの源もふの思ひゆらん  
紀伊也

去勢の浦に合ふ赤糸、  
方回

まの源のよびはしはし  
一合全回

福のよびはしはし  
かひ方

いばせの源のよびはし  
いばせの源のよびはし

いばせの源のよびはし  
いばせの源のよびはし







角田川

新勅撰十一 盛方朝臣

すきいしに記に記し水のある所のなるあり思ひ知る

新撰十八 法中清書

記さしとせうとに記しはなるの人の名のことづく

作持物語よむき一吐くおと志しりよき此必

のなりふのなるなりし所のほたりありてと

五十四 弁基法中

まららととくくれくいはれんとまらにひらりあり

駿河國地 勢をいあてあてのあるがふ記のこと

うさくらんもなるなるのなるなりあり

片墨の朝原すし山御社九月のさか

山五二の勢をいあてあてのあるがふ記のこと

かゝ墨乃ひはらひの推まらふはらひの陰よせんか

かゝ墨乃ひはらひの推まらふはらひの陰よせんか

かゝ墨乃ひはらひの推まらふはらひの陰よせんか

拾五十一

かゝ墨乃ひはらひの推まらふはらひの陰よせんか



片畧其物系かゝるを山乃同業の志がら  
く結まきしとて皆大おまなりん

新古今

時多し多しに福多しと畧の毒杖つくにさあめ札  
序畧森がたて片畧社の杖よを後求るを  
山城がり新勅推片畧乃結乃本葉も多あ付  
ぬとらるるも同亦を能因う多れ月のうけり  
こまかんし片畧杖はくさる杖を多分には  
子 積古今西行山乃の片畧うけく志ひの野

のちのひよきとてるものや柳は是あかあ  
すしとて推名を免しとてかた

まの杖別ふくしとてかた

拾十

云復々

り、はやまの杖は凡ゆるらわ心あうら此瑞一からん

る五七

まはるやまの杖の塩乃まのりよのりよ心著は志  
志賀去うけとて近は四湖本河亦かの  
まの杖大いことわが



五十五

志を以て信じてのむらと焼塩のかけきこも海も我々の

筑前國志田うこ也志の海方めりあ志りやき

ちてよめるもこれ也近に志賀筑あハ志賀也

初つ結浦 じりれ松系

藩

赤人

しりれ浦し志田めらくれかこりるさへと指て田島

紀伊也也むけ海もびううれ内なり

藩

聖武天皇

いしあむしりれ松りくハ後セハ塩干れり川崎

海内由也 じりれ海もびううれ内なり

藩

老ぬき寺教

伴海勝やわら其系系ハ塩セハ塩干れり川崎

是ハ伊勢なり じりれ海もびううれ内なり

山崎のよし 六田の大記

古し

山城のよし 其系系ハ塩セハ塩干れり川崎

よしゆり流川しり山機も同なり

井挂

一



... 勇七 ... 六國のよき...

萬九

情を六國城の河橋... 大和也新古今... 柳原みくりも... 但山城のよき... 柳原みくりも...

... 萬七 ...

... 是も同承るる人 ...

大徳乃招つるくもあつたは...

これハ伊勢國海邊也各別の事...

城渡とらぬて人乃不え志...

は書加也すものばさ橋ハ...

後西園寺...

野上より内におかれ八幡山...

是も亦めり...



玉川野田可野海 一 一 墨 井 子

後十回

此の山は山にして山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

万葉の山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

新古と

夕陽の山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

後拾三 相換

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ

山は山なりと云ふは昔其の云ふは山なりと云ふ











のまはけるかへよまはのりてふやとまを

古今

後推あさひらは其の志を承りて入るるやとまを

後推

のまはけるかへよまはのりてふやとまを

古平花よは山塚とさるりてゆるり大系小野

と向ふとおりのりや後古よは志けき

かめ志けりりめ又あまりて後の袖ぬり

後薩摩薩摩内院 遺捨遺後人の宿がり夜袖き

て夕をねむりよまの志けりり薩摩是亦

りり小野とけおほしめさる近江よ小野と

ゆり宿あり志けりりまあり是亦いあり

後の志けりりま相叶ま但まは

遠託推量ま後也凡まとんりりま小野

とよむ非まなりまなりま小野流と

山科小野まなりま小野古のい伊勢方國也

花

後雅母

ゆり小野乃舟なりとれ也るのれ弱のゆり



山を國不分明

玉の

紙巻

拾遺

重

夜不抱

第七

足利乃

後撰

の中

丹後

新古今

の

接

の

の

の

和歌抄

四十六



家名に於此の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也  
山城國也之治川を過りて推りすかんのけいじり  
乃奥あり河の南北と云ふ治川のつた

うらま山脈國の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也  
古名に於此の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也  
山と云ふ治川の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也  
宅有別細名と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也  
山と云ふ治川の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也

秋の野の尾花の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也

大今と云ふ山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也

松十の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也

この山と云ふ山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也  
近の山也大草會并に松十の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也

那九

大善乃入の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也  
山城國之治川也俗に松十の山と云ふ事すむじ世に傳らるる山といふ也

松山



後拾遺八

定頼公

松山郡の入りし月時よりむらひて西へ去るに  
大さかたにせむなるもひかたにせむなるもひ

後撰十一

贈大政大臣

香山にけりきりくもはあきん下りふかふおれ物と  
隆興末松山也

杉原志保

一巻

大正十一年

海舟の遺稿

海舟の遺稿

五二

海舟の遺稿

國分也

おきりしやま——山——の候

海舟の遺稿

紀伊國

海舟の遺稿

海舟の遺稿







陸奥也

五十

とよたにやればかへものころは海をあらひあんな  
松浦也

濱拾五

祝平成貫

浪するころはあふ海をあらひもさくあつた也  
近の國坂本乃ころのふゆ水

大にたつた山に浦に海をあらひもさくあつた也

新勅撰五

通念右大夫

雲のうしろにたつた山に浦に海をあらひもさくあつた也

金葉八

紀伊

あつたころはあふ海をあらひもさくあつた也  
この浦に海をあらひもさくあつた也

新勅撰一

たつたころはあふ海をあらひもさくあつた也

古平村よりのものみよりの里

たつたころはあふ海に濱

あつたころはあふ海をあらひもさくあつた也



かきし海乃あさけのちあまをいそいでるるをいふれある  
越中一國也

五

倭古比あさけのちあまをいそいでるるをいふれある

振津國也

あまのうらみおく乃海あまの浦一川系

あまのうらみおく乃海あまの浦一川系

あまのうらみおく乃海あまの浦一川系

左門部王任地雲守時要郡内娘子迄末有幾時

院政始末累歴之

始子之のこれるる出るる也

新古今十回 定家朝長

あまのうらみおく乃海あまの浦一川系

あまのうらみおく乃海あまの浦一川系

海澄奥七

順徳院御宇

あまのうらみおく乃海あまの浦一川系

あまのうらみおく乃海あまの浦一川系



拾十八 人磨

おれらの身の上の事をもたはなすはりのひきおぼせのひら  
まの物も伊勢ゆとさうり大の浦の事

お方らうー河系

お方十八は任地をいへる一は任地又たこの

を海ふも我の思ひの浦のありともおれらにれあ

越中国地 布勢海ま

右二十 伊勢

れ方らうーは任地をいへる一は任地又たこの

お方十八は任地をいへる一は任地又たこの

お方十八は任地をいへる一は任地又たこの

お方十八は任地をいへる一は任地又たこの

お方十八は任地をいへる一は任地又たこの

お方十一

お方十一は任地をいへる一は任地又たこの

下野国地

お方十一は任地をいへる一は任地又たこの

あゝ見れうー



乙右九十九 一 道補心

は育ちありつゝおれたを少くも物をも此浦にめてこそ  
多葉は書ふたらぬのゆへにすゝりくつる所よりかん  
乃くつゝおとありていふの事いふはむいふ

金八 大中長輔弘

まうしげにそのの備乃くひききとも記多よみゆるに  
河書よ候勢れもいふいふよとよありとあり

新勅撰 家衛心

我とまのあつと志つては二見のめくれ袖は波そけも

尾張國とのあり

あさりし浦に瀉は泊し山の山

あまの葉のしんせきしり劑會子

夕れはまみりするふん何者のあつた浦よおまかち

松津國也

新十回

のさめは下れあつよおまのめりきうのた乃まおめや

國不分明

あまの葉のしんせきしり劑會子



みらの其のまゝ乃治の程のりてうらふ人よきわつらん  
百十一

何き山野けさるゑゆる山野井ののまにの海にみか招き  
せし、陸奥國也

新編新八

市原王

と程のちてあつてさかぬあもきと程のりてうらふ人よきわつらん  
尾張國とさつ後ありて

あつてさかぬあもきと程のりてうらふ人よきわつらん

あつてさかぬあもきと程のりてうらふ人よきわつらん

かみ出らさるゑゆる山野井ののまにの海にみか招き  
近にありて

あつてさかぬあもきと程のりてうらふ人よきわつらん

豊國乃が、さかぬあもきと程のりてうらふ人よきわつらん  
あつてさかぬあもきと程のりてうらふ人よきわつらん

あつてさかぬあもきと程のりてうらふ人よきわつらん

あつてさかぬあもきと程のりてうらふ人よきわつらん

あつてさかぬあもきと程のりてうらふ人よきわつらん



古十五... 新古と十七... 惠慶法師... 春廿日の... 橋と... 橋と...

後撰十七

世中...

拾十

此...

下浦

新勅十一... 接...



三嶋の海乃くこわる若久根の二一兵衛よまめ尻あわ  
是ハ折尾坐之十一よまめハ別所也

後撰十六 好忠

信基よる申の浦乃の自心めきかり親や成らん

折尾よる但みよるあはれあはれ

力十七

折尾の海とよみ今申折尾の海乃月空下る

越中岡也力十七かまよま折とそかひよかんか

物より折乃山とひさしてそくればとあまハ大和

あまのやと折乃ゆきとそ力十六よまゆよ

あまの山よまそこむむらふらんおも

あまの山よまそこむむらふらんおも

あまの山よまそこむむらふらんおも

野海

後撰十六

長能

あまの山よまそこむむらふらんおも

あまの山よまそこむむらふらんおも

あまの山よまそこむむらふらんおも







井史抄

三ノ巻

新勅七

道彦

久が正月のつらの人とてあつたのりよはひもる

丹波公大掌會并也

城くれ月のろくはやあつたえと花に散るつら

是ハ山城を柳川も也今も桂宮院と申す

後九条内大臣

まのむらろ月のおつたえはく海の中

是はけしきなり

とん 一 四 一 の浦 一 山松

洞二のの 好忠の

山城をとも國の西宮かたをけしきのおげさそ

まのむらろ

五十二

郭をともしれ浦をともし波のきんく

木園をともし

まの島城を山松をともしそ我をともし

山城をともし

かんむろ 一 山 一 の巻 一 外山

井史抄

三ノ巻



第七

王冠ある系よきあたふありをむむる乃出いあるあり

拾七

神武の乃きむるはきむるん註國の所刻氷成それ家

五十三

大織冠

おろけけむむるとなるのくくむむ六路ありとすすの

山嶽國也

たきけけいの森 あまの森の森

五十二

あはさりの森よきむむるのれれ我大志のくひきりれ

續古今

村きく凡幾志のそあしとらあはたの森乃多よあん

いさむお紀伊國也あ回形あるさよあ流の橋津

あまの森の森

あまの森

あまの森の森

あまの森の森



大和國也... 井野抄... 大和國也... 井野抄... 大和國也... 井野抄...

い... 後... 古... 井野抄... 井野抄... 井野抄... 井野抄...

古... 井野抄... 井野抄... 井野抄... 井野抄... 井野抄...

井野抄... 井野抄... 井野抄... 井野抄... 井野抄... 井野抄...



井生抄

廿二

淡路近にありて此平の非をいふ

千十八 歌楠心

あまの乃引りたるの傍にありて妹のあのを付はる

いふらあまらよはる所はえ

花半梅

万

雲のれどよもの神もあはれなるをいふ

伊弉國と又陸奥とをいふ

言平後孫前國をいふ

松浦のつとむる所ありてはるの神をいふ

陸奥國也但松浦も伊弉國と云流あり

可あはれ

たかひの昔はかたはらにありてはるの神をいふ

浪よりありてはるの神をいふ

備前

さかひの昔はかたはらにありてはるの神をいふ

今もかたはらにありてはるの神をいふ

山城

井生抄

廿二



井庄抄

西ノ  
廿二

乃とせらるゝ一のふれらるゝ一の橋

とせらるゝ一のふれらるゝ一の橋

とせらるゝ一のふれらるゝ一の橋

道

とせらるゝ一のふれらるゝ一の橋

とせらるゝ一のふれらるゝ一の橋

何ゆゑ

とせらるゝ一のふれらるゝ一の橋

とせらるゝ一のふれらるゝ一の橋

やまのふれらるゝ

何ゆゑ

とせらるゝ一のふれらるゝ一の橋

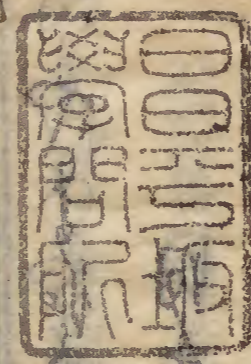
とせらるゝ

井庄抄

西ノ  
廿三



Blank page with faint horizontal lines and some ink smudges.



文記甲子

Faint handwritten text in a cursive style, possibly a letter or document, written vertically.



